

ダビデ王物語講解説教サムエル記上17章1-54節  
『ダビデとゴリアト』

イスラエルとペリシテとは長いあいだ戦いを続けてきました。その背景は長い歴史があるのですが、そもそもイスラエルの民が王制を引きたいと言い出したのは、ペリシテとの戦いに勝たなければ、滅ぼされてしまうという危機感があったことは間違いのないことです。ペリシテという言葉が後にパレスチナという言葉になったと言われていますが、強力な軍隊を持ち、イスラエルと戦争を繰り返していました。

サウルという王さまがイスラエルに誕生し、サウルは軍隊に力を注ぎ、ペリシテ軍と向き合いました。17章はそういう中での出来事だったと思われます。

イスラエル軍と、ペリシテ軍が一つの谷を挟んで睨みあっていた時のことです。ペリシテ軍の中でもひと際大きな剛の者が進み出てきました。彼の名前はゴリアト。その背の高さは聖書によれば2メートル90センチ。巨人です。彼が身に付けていた甲冑(かっちゅう)、鎧兜の重さがなんと57キロ、というとんでもない人でした。ゴリアトはイスラエルの戦列の前に立ちふさがり、声を出すのです。「お前たちの中から一人のものを選んで、おれのところへよこせ。一騎打ちだ。もし、お前たちが出したその一人がこのおれに勝てば、我々はお前たちの奴隷になろう。だが、おれさまが勝てば、お前たちが皆奴隷になるのだ。」ゴリアトのこの叫びにサウルとイスラエルの全軍は肝をつぶし、恐れおののいた。

ダビデは父に頼まれ、戦いに出ている兄三人のために、食料を戦場に持っていきました。戦場に着くとダビデの耳にもあのゴリアトの叫びが聞こえてきました。イスラエルの兵士たちはこの声を聞くと、おそれ、後ずさりしていた。サウル王はゴリアトを倒すものがいれば、大金と共に、王女の婿にするとまで言っていたのですが、誰もゴリアトと戦おうとしませんでした。

ダビデは兵士たちをひるむ姿を横目に、「生ける神の戦列に挑戦するとは、あの男はいったい何者だ」、と周りの兵士たちに言いました。ダビデの兄は戦場に来ている弟に気づくと、「何をしにきた。のこのこ戦場を見学にでも来たのか」と、激しく弟をなじりました。兄からすれば、ダビデはまだ子ども、こんなところでうろつく暇があるなら羊の世話をしている、ということだったのでしょう。しかしダビデは兄の言葉にも承服しかねます。「わたしが何をしたというのですか」。そういった他の兵士たちにも同じような質問を繰り返します。

戦場でのこのダビデの言葉を兵士から伝え聞いたサウルはダビデを呼び寄せます。ただ物おじしない、というだけでない、ダビデの言葉にサウルは引きつけら

れた。

ダビデの方からサウルに語り始めた。「あの男のことで、誰も気を落としてはなりません。僕(しもべ)が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」サウルはそれは無理だ、と言います。「お前は少年だし、向うは少年の時から戦士だ。」。だがダビデは王の言葉であろうが、なんだろうが構わない。わたしは、羊の群れを飼っていますが、獅子やクマが出て、群れの中から羊を奪い取るときがある。その時には追いかけて、その口から羊を取り戻す。向かってくれば、獅子もクマも打ち倒してきた。獅子の手、クマの手からわたしを守ってくださった神は、あのペリシテ人の手からもわたしを救ってくださる。ダビデはそういって、ひるまない。サウルはこのダビデの言葉を聞き、そのたたずまいを見て、彼を戦場に送り出す。サウルはダビデに自分の鎧や兜を渡したが、ダビデはそれを一度は身に着けたけれども、すべて脱ぎ去り、石を五つ選び、石投げ紐を手にして、ゴリアトのもとに行くのです。ゴリアトは自分のもとに来たイスラエルの兵士がまだ少年にすぎないのを見て、軽蔑と侮りの混じったまなざしで、見つめる。だがこの戦いは、あつという間に終了する。ダビデの石投げ紐で飛ばされた石はゴリアトの眉間に撃ち込まれ、巨人ゴリアトは倒れたのです。

ダビデとゴリアトのこの物語は、イスラエルの長い歴史の中で繰り返し繰り返し読まれてきました。この物語は古代の戦争における若き英雄の武勇伝、後に優れた王となった人物の英雄譚として読まれてきたとしても何の不思議もない話です。若くて経験もないダビデが大男のゴリアトを倒す、それは日本で言えば桃太郎のような武勇伝にもなりかねない話です。しかしこの17章を丁寧読むと、そうは語られていないし、武勇伝ではないことがよくわかる。

イスラエルとペリシテは繰り返し繰り返し戦い続けていました。宿命と呼ぶべき戦いを続けてきた。それは確かに歴史的に、また地理的にイスラエルとペリシテが長年にわたって置かれ続けた状況だったのですが、人々はそこから、人間が何かと戦い続けている、ということを繰り返し聞いてきたのです。わたしたちがずっと戦い続けているもの。宿命的に戦い続けているもの、それは自覚していないに関わらず、罪との戦い、なのです。罪との戦いと言ってもそれは抽象的なものではなく、例えばそれは具体的には、一人一人の奥深くにある愛の戦いとして現れるといった人がいます。それはとても日常的な普段着の戦い。目の前にいる人を愛していくという戦い。戦いという言葉がなじまない、と思う人がいるかもしれませんが、人を愛することは人間にとって戦いです。なぜならそこで人は自分の罪と否応なく向き合い、自分の罪と戦わざるを得なくなるからです。人を愛することだけでない、神を愛することも、わたしたちにとっては戦いです。

サウルが神から王さまとしては退位せよ、と言われながら、退位しない、無視しようとする、それは彼が自分の自己愛の中において、自分本位の我の中において、神への愛に生きられないということでもあります。神を愛そうとすれば、人は自分の罪と戦わなければならない、ということです。神よりも自分の意志に従いたい、という自分の罪と向き合わざるを得なくなる。隣人を愛することも同じ。強盗に襲われた人を見て見ぬふりをして通り過ぎた祭司やレビ人が自分である、ということを知っている人は、隣人を愛することが罪との戦いであることを知るのである。

しかし、問題は次の次です。サウルは、この戦いを自分たちの兵力とペリシテ軍との戦いだと思っていた、つまり人間と人間の戦いだとみている。だからゴリアトの前で、自分たちの力のなさにひるむのです。自分にとっての根本的な戦いを神ぬきで、神がないかのごとく思い込んで戦おうとする、それがまさに罪の力です。相手がとても巨大でしり込みし、とても自分には戦えないと思わせる、愛するという戦いにおいて、早々に引き揚げさせる、自分には無理、と思ひ込ませる。それが罪の力です。ゴリアトに対してダビデは、「お前は何者だ」と言いました。ゴリアトはお前の力ではおれには勝てない、と思ひ込ませる存在です。お前なんかの力ではとても無理だ、と思ひ込ませる力、それがゴリアトだとすれば、ゴリアトとは、わたしの中にある罪の力なのです。人を愛することにおいても早々に撤退させる力、それが罪の力であるように、お前の力ではどうしようもないのだ、と罪は迫ってくる。

ダビデは、自分が羊を獅子やクマから守ったのは、自分の力ではなく、神の力なのだといいます。35 節にある羊を取り戻す、と訳されている言葉、37 節の獅子の手、クマの手から守ってくださったと訳されている言葉、もとの言葉は同じ、救い出してください、という言葉です。神が働き、神が導いてくださる、神の働きの中にわたしはあるのだ、とダビデは語るのです。神を愛することもわたしたちの側からすれば戦いになっても、神からの愛を受けて活かされていくのなら、それはまた違うものになっていくのです。ダビデの兄も、王サウルも、お前には無理だ、と言った。ダビデのような少年が百戦錬磨のゴリアトと一騎打ちして勝てるわけがない、と言ったのです。大の大人から見たらそうとしか言いようがない。だがそれは、ただ人間だけを見ている考えです。教会の中にも、そういう考え方はすぐに入ってきます。人間しか見ていない考え方、もの見方。もし人間しか見ないのであれば、実際、わたしたちが自分の罪と戦うことはダビデがゴリアトに向かうように無謀というだけでない、敗れることは必至です。だがわたしたちは自分の罪と自分の力で戦うのではない。

ダビデは、自分が羊飼いとして羊を連れ戻そうとするときも、神は救い出してください、と今ゴリアトに向かう時も、神は救い出してください、と言っているの

です。それは神が何とかしてくださるといって、自分はどこかで昼寝をしているのではない。獅子が襲ってくるなら鬣(たてがみ)をつかみ、自ら戦う。熊にも立ち向かう。だが救い出してくださるのは神さまだ、と言っているのです。わたしは神に用いられていく器だ、そうダビデは言っているのです。神さまの働きの中に自分はあゝる。それがダビデの信仰でした。信仰というのは、日々そのことにおいて生きるもの、それが信仰です。頭で捉えたものが体で生きられていく、それが信仰です。イスラエルの兵士たちも、サウルも、神が働いているということを知らないわけではなかったでしょう。みんな知っていることです。しかし知ったことが生きられていく、それが信仰です。ダビデは、サウルの与えた鎧も兜も全部脱ぎ捨てて、普段から使っている道具だけでゴリアトに向かいました。それは信仰の戦いは、今のふだんのあなた、今あるあなたが神に用いられていくほかないし、普段のあなたでいい、ということなのであり、それ以外にはない、ということなのです。

人間の罪との戦いは複雑になっていくのかもしれませんが。しかし、その中で、少年ダビデがそうであったように、神が働いてくださる、神の働きの中にある、という単純な信仰に帰っていくことができるように、そして、神に用いられていく器としてください、という祈りに帰っていけるよう、導かれていきたいと思ひます。